
魔法使いの弟子

森下しあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの弟子

【著者名】

森下しあ

NZ-1-392

【あらすじ】

闇のある変態男子高校生の志魔野コウは貧乏生活を送っていた。ある日魔女と出会い、妹を生き返らせるために様々な困難に立ち向かう物語。

シマノ、生き返る

ソノ日ボクハ死ンダハズダツタ……

願イラ叶エルタメニ死ニ、願イラ叶エルタメニ生キタイト願ウ……

人間ハ愚カダ……

キーンゴーンカーンゴーン

からつと乾いた校庭に鳴り響いた、季節は夏。

ちょうど後1週間で夏休みが始まる。ふだんより格段に落ち着きが無くなつた生徒達が自分の席から弾けるように離れ、友人の席へと向かう。

「ねえ、あの噂聞いた?」

「女子トイレの魔女のはなしでしょ!」

「願いをなんでも叶えてくれるんだってね、私、彼氏ほしいなー。」

「わたしもー、あははー。」

その教室内で休み時間だというのに伏せている男子が一人。特に寝ているわけでもなく、時々顔を上げては外を眺めて、また伏せる。

しかし、少年の目には一筋の光もなく、淀み、曇っていた。まさに虚ろな目をしていた。

「ねえ、あの子だれか知ってる?」

「あ~目が怖いよね。どう見てるか分からんし……」

「志魔野」「ウ…だけ?なんか、家族が事件で死んじゃつたらしいよ。」

「え、まじー!!可哀そしだね。」

「うわっ、やば!大きな声出すから、こいつ見てんじゃん!」

夏休みの予定を話し合い、盛り上がるクラスメイトとは対照的に、この志魔野「ウ」という男はクラスで浮いていた。

事件のこともあり、まわりからは話しかけがたく、しかも自発的に人と関わろうとしなくなつたので、次第に誰も関わらなくなつてい

つた。

再びチャイムがなり、生徒達が席につく。志魔野は顔を上げ、ノートと教科書を取り出した。

そして、虚ろな目で黒板を見つめる。

シャーペンの芯を出しノートに書き込む。また虚ろな目で黒板を見つめる。

この動作を放課後まで繰り返す。

いつもなら、誰よりも早く学校を出る志魔野であったが、今日は残つてひたすら参考書をといていた。

数時間後、教師がやつてきて志魔野に話しかけた。それは彼にとって3日ぶりの会話だった。

「お、志魔野…やつてるじやないか。」

「…まあ。」

「じゃあ、鍵は頼んだぞーあと、あんまり頑張りすぎんなよ。」

「はー、わようなり…」

教師は去った。

思わず彼はニヤリとした。

本日の業務終了。

事件後、彼にとつては、人との関わりは何の意味もなさない、ただの煩わしい業務と判断され、学校では淡々と過ぐすことにしていただった。

あたりは暗くなつて、電気をつけないと何も見えないようになつていた。

夏なので、こんなに暗いところとは、7時をこえているはずだ。

鍵を閉めると彼はどこかに向かつて歩きだした。場所はトイレ。ただし、それはただのトイレではなく、女子トイレであった。

女子トイレにはもちろん初めて入ったのだが、意外と汚なかつたことに志魔野は少しショックを受けた。そして、一番奥の洋式トイレの個室に入り、蓋のつえに座る。

0時までここで待たなければならなかつたので、彼は仮眠をとることにした。

皿をつぶると、こゝそつ鼻につく臭いを感じた。

レベルの高い変態なら快感なのかも知れない、などと彼は考えたが、そのうち、女子トイレに侵入して数時間過じ、やうとこゝの自分も一種の変態なのだと悟ってしまった。

考えにふけつてこねりついで、彼はといひ飛びこしてしまった。

そして〇〇時〇〇分

今日の休み時間女子が言つていた、あの時間がきた。

「ねえ、せひや…」

艶っぽい声誰かがでれでれやく。

田を擦り隣を見ると黒い服の女がいた。

「あら、どうしたの？…私に会つに来てくれたなんでしょう？」

やつこつて、女は長くて薄い色素の髪をかきあげ、彼の膝に向かい合つよつて座つた。

彼の心臓はドクドクと高鳴つた。

距離が近いとかそういう理由ではなく、本当に現れたという驚きや、願いがよつやく叶つてこつた喜びや興奮によつて、胸がいつぱいであつた。

そんなこつぱいに詰まつた胸がいまだかつて無くぐらうじドクドク

「まあ、だいたいそうだ。…本当に願いを叶えてくれるんだろうな？」

「もううんよ。あっ、でもお話がしたいな。君の家にお邪魔してもいいかしら？」

「ああ、分かった。」

早く願いを叶えたいという思いが彼を急かしたが、なんとかその思いを押し殺した。女に機嫌を損なわなくても困るからだ。

女は指をならした。

すると、景色は真っ暗な女子トイレから、二つのあの部屋に一瞬にして移り変わった。

「…魔女。」

彼の胸はすでに願いを叶えたいという思いがいっぱいに詰まっていたのに、さじにじべつと詰め込まれ、ドクドクと高鳴った。

もう吐き出しきりだ、心臓を。

「そんな驚かなくて もおー。わあ、お話をはじめましょうか。」

魔女はそういうと、電気をつけた。

部屋は古いアパートでとても高校生が住んでいいとは思えない。

「…わたし、知ってるんだよ。君の名前や、君がなんでこんな部屋に住んでるのか。…願いはぜひせ、家族を生き返らせて…でしょ？」

「…ハズレ。妹を生き返らせて欲しい。」

「ふーん、妹だけ？やつぱり変わってる。…あの学校に来たのは、たまたま君を道で見つけたからよ。」

「なんで俺を？」

「なんでもって自分でわからないかなあー。君って不気味で陰気よ。魔女に言われるんだから相当…あはは…」

言っていることは裏腹に、無邪気に笑う。魔女も相当ひしげ。少し頭に来たが、志魔野はそのまま聞き続けた。

「その田、その田を見るどゾクゾクしちゃう。何も見ていないようで、一つのことしか見えていない、そんな田。魔女のそれと似ているわ。」

「……。」

「はいはい、願いを早くかなえろって顔ね。分かった。」

「一つ注意！魔女ってね、人間の願いを無償で叶えてはならないの。等価交換つてやつ。」

「…別に妹を生き返らせて貰えんだつたらなんでもあるわ。」

「システムってやつかしら。君の心臓と引き換えに、妹を生き返らせてくれるね。」

「心臓？」

「…いつおひと思つたとき、魔女は指を曲げて何かを呼び寄せる仕草をとつた。

次の瞬間、信じられないほどどの痛みが彼を襲つた。まるで全身をひかれあられぬよつた。

その痛みの波をこえると、周りは血の海だった。

もう一ミツも動けそうにない。死ぬんだと悟つた。でもこれでいい。妹が助かるんだつたらこのぐらいい、別にいい。彼はそう思ふたので、うつすらと笑顔を浮かべた。

「やめなさい、ヘンゼル！」

そんな声が聞こえた。その瞬間とられた心臓があつたはずのところから鼓動がした。

ドクドクといつ音とともに、活力が湧いてきた。

声の主を見ると、また黒い服の女だった。しかし、それきの魔女に比べ、この女は小柄だったが、同じ色の髪をしていた。

「あら、この子の邪魔までするの？ 可哀そりよ、じゃましきや。」

「あなたこそ、願いを叶える気なんてないんでしょー。」

「…まあね。心臓さえいただけば、別にどうでもいいしね。それに、この願いはいくら私でも叶えてあげられないかも！」

「それ、どうこりつひとよー。」

「あーもつつのこと…そのブッサイクな顔、一度と見せないでね。じゃあ、ほつきは借りてくれ！バイバイ！」
いつたいどうこうことなんだ…、生き返ったばかりの彼には大きなさる衝撃で呆然としていた。

「…大丈夫？」

優しく声をかけたのは、小柄な黒い服の女だった。

「私は魔女のグレーテルよ。あいつの妹。あなたにはすくへ悪いことをしてしまったから、わたしが償わせてもらひわ。」

「妹は生き返らないのか…？」

彼の耳には絶望だけがうつっていた。他には何も知らない。

「残念だけど…。魔女は陰険でひどい生き物なの。特にあの女は。」

「お前は妹を生き返らせる」とは出来ないのか?」

「普通なら出来るんだけど、あの女がいつも無理のようね。あなたの妹はいま特殊な状態なんでしょう。」

「特殊?」

「わからないけど、多分、誰かに魂を囚われている。…あなたの妹はなぜ死んだの?」

「…それを話せば生き返らせる」とが出来るのか?」

「…いいえ。とにかくすぐは無理よ。」

「じゃあ、言わない。他に方法は?」

「『』めんなさい。…分からないわ。」

「…畜生!…役たたず!俺はこのためだけに生きてるんだ!…命なんていらない、だから妹を生き返らせてくれよーなあ、こんなに頼んで…」

泣きながら発狂する彼に拳が飛んできた。おもいつきつ。

彼は三メートルぐらい吹き飛んで、訳が分からず、そのまましゃが

みこんでいた。

「お前はバカか！妹、妹ってそればっかり…。そんなんじや妹を対生き返らせるなんて絶対無理よー！」

「黙れー。」

「あなたは死ぬところ…いいえ、一回は死んだ。それを生き返らせたのは誰だと思ってるのー勘違いもいい加減にして。私がいなかつたら、妹どころか、あなたの命さえ無いところよー。」

しばらく沈黙の時間が流れた。

「…」めん。

「いいわ。そうなる気持ちも分かるから…。まだ願いを叶えたい？」

志魔野「うは深く頷いた。

「じゃあ、私の弟子になりなさいー。そつすれば、そのうち妹を生き返らせる事ができるかもしないわ。」

シマノ、寝込みをおわづ

キーンゴーンカーンゴーン

志魔野コウは目を覚ました。教室で寝ていたらしい。しかし、寝る前までの記憶がぽつかり抜けていた…。

起きたばかりで、完全に働かない脳を活動させ、考えてみる…。

弟子…、魔女の弟子になつたんだ…。

そんな記憶に反し、気付けば教室にいた……と言つゝとせ、あれは夢？

彼は馬鹿らしいあるわけないと想い、再び煩わしい作業へと戻つていった。

そして、今日も一番最初に教室をでて帰宅した。

家は高校からはかなり近く、歩いて20分ほどのところであった。

自転車ならもつと早いのだが、わけ有りでそんなものは持つていなかつたので、毎日歩きで帰るのだった。

歩いてきた大通りとは違い、静かな路地にはいる。

それから10分。

よつやく見えてくるのが彼のアパートだった。

築50年といつ古い物件で、見た田代つり、風田なし物件であった。

志魔野が住む部屋は、一階の4つの部屋のうち、階段側から数えて2番田であった。

古く塗装の剥げたドアを開けると、中は荷物がほとんどなく、あるのはぐれやぐれやになつた布団と棚ぐらいた。

彼は棚に近付き、ただいま、とつぶやいた。

これが彼の日課だった。

彼の話相手は、棚の一番上にある妹の写真だった。挨拶だけでなく、長く話すこともあった。

彼は今日、あの夢の話をした。魔女がいたこと、自分が死にかけたこと、魔女の弟子になつたこと。

かなりはつきりした夢だつただけに、話が尽きなかつた。

よつやく一段落話しあると、彼には写真の妹が笑つているよつだった。
感じた。

もともと笑つている写真だったが、より一層笑つているよつだった。

これは全部夢のはずなのだが、やはり疲れたので、彼は寝ることにした。

ぐちゅぐちゅに入る「う」とすると、何かがいる…？

なぜ今まで気付かなかつたのだろうか。

一気に布団をめくらあげると、そこには夢のなかに出てきた魔女だつたのだ！

「うわっ！」

と叫ぶと、隣の部屋から壁を叩く音がした。

「うわっ！」
の方が多いのか？まだ夕方だぞ。と思ったのだが、魔女がいたことの方が衝撃が強く、怒りなど忘れていた。

魔女は魔女らしからぬ顔で、無防備に寝ていた。袖がない形状の黒いワンピースで、もともと短い丈なのにさらに短くなり、いい感じに白く細い足がのびていた。

彼はその足に妹を思い出した。

妹の名前は志魔野力オルだつた。彼と同じ真っ黒な毛で、さらさらとした長い髪を一つにわけてみつあみをしていた。今どき珍しい古風な雰囲気を持ち合わせていた。

「カオル…。」

彼はそのまま足を下から上に撫で上げた。

「……んひ、やめてよ。」

そのきわどい行動に魔女が気付き、起きてしまったようだ。

「えっと、あの、その……これは違うんだ。」

「発情?」

「いや、だから、違うんだ。」

「人間の男に興味ないから、無理よー。」

「だから違う!」

結局、いくら弁解しても、駄目だった。事実、妹を思い出して触つてしまつたというのもかなり気持ち悪い。

「あなた、弟子になつたんでしょ。弟子がこんなことしていいのか
しい。」

「違うんだ。何かいると思つて触つたらこんな感じに……。」

「言ひ訳する子は嫌いよ。嘘がバレバレよ。だつたらなんであなた
は私の隣で添い寝していて、手は太ももにあつて、顔がこんなに近
いのよ!全く、これだから人間は……。」

魔女の言つとおりであった。彼は魔法が使えるだけでなく、弁もた

「うじ」とを発見し、少し感心したのだった。

「すいませんでした。あまりに綺麗な足だったので、うっかり触つてしましました。」

「言わせてる感じが否めないわ。心から説びなさいよ。」

「分かりました。本当にすいませんでした。」

「何か味気ないわ。まあ良いわ。でも、寂しかったら、またうひして…うふふ。」

セツコヒと魔女は「ウ」を抱き寄せた。足を絡ませ、惣ましげな声で耳元でうひう囁く。

「…嘘よ。」

その瞬間寝技をかけられた。

「こいつたー！痛い痛い痛い痛い。」

「魔女はうひう生き物なの。また痛い目に会わないよううん気を付けるのよ、変態！」

心から反省する志魔野だった。

シマノ、隣人出金つ

「まだ怒つてらりしゃるんですかー？」

「そんなに心は狭くないわ。それより、あいつに怒つてるのー。」

「あいつ……？あいつってヘンゼルとかにうせつ？」

「もうよ。あなたもあいつに殺されたのよー。みんな飄々としていていいわけ？私は許せないわ。」

よくよく考えるとその通りだ。しかし、衝撃や痛みのせいか今では記憶はすっかり薄れていた。

「一番問題のはまつきよー！あいつ、わたしのまつきを取つて行きやがったわ！絶対許せない。」

グレーテルは姉のこととなると、気性が荒くなつた。今にもなにか破壊しちゃうとするまつた、右手にぐっと力を入れている。

そうこえ、志魔野が殴られたときのぶつ飛びようとしたら凄まじいものだった。

彼は、氣を引き締めて挑まなくてはならぬこと覚悟した。

「お、俺もムカつくよー。」

「でしょー。もうこうわだから、今からまつを作つよー。」

「今……ですか？」

時計を見ると現在22：00
もう外には出たくないんだが…

「ああ、まずは、材料買いに行きましょうかー。」

「…はー。」

「あまり乗り気出端誘うね。たしかこの辺に魔法用具屋があるはず
なのよ。知らない？」

「え、グレーテルさんがご存知じゃないんですか？」

「悪かつたわね。人間界に来たのはこれがはじめてでね。なんかぼ
い所とかないの？」

「俺も最近引っ越してきたばかりだから知らないよ。」

「…
ドン！」

また壁を殴る音…。階段を上つてすぐの部屋からだった。

志魔野はここに越してから、まだ隣人の顔を見たことがない。

面識があるのは、真下の部屋の西本さんとつお姉さんだけだ。

「この建物、複数の人間が住んでいるのね！隣の人聞いてみましょ？」

「…やめとけよ、隣のやつは壁なぐってくるし、一回も見たことがないから、多分ろくなやつじやない。」

しかし、すでにグレー・テルはいなかつた。

「すいませーん！」
外で声が聞こえた。

「はい、お待ちください！」

聞きおぼえが無い男の声が聞こえた。

志魔野も外に出ていくと、そこには彼と同じぐらいの歳の男がいた。

「…どうも。」

そういうて志魔野はドアをしめた。

彼は基本、ヘタレ人間なので、逃げるしかなかつた。

隣の住人の容貌があまりにも予想がだつたのだ。

志魔野と同じぐらいのとしに、髪は金髪、そして、顔はイケメンだった。

ずっと隣は駄目なオッサンが住んでいるものだと思っていたばかりに、かなり驚いてしまつた。

「ただいまー！」

「おかえり……。」

「隣の人、いい人だつたよ！それに、顔が……。」

「そうだな。」

「あれ、嫉妬？」

「違うし。で、どうだつたんだ？」

「分からぬいけど、それっぽい所があるつて言つて、地図までもらつたよ。」

「本当に親切だな。こんな怪しいやつなの。」

「悪かつたわね！私は魔女に誇りを持つてるの！だからこの黒服や帽子やほうきは絶対やめないわ。……さつ、行きましょうか。」

「人間界ではやめたほうがいいと思つた……。」

そんなこんなで、魔法用品店らしき所に出発することになったのだった。

シマノ、猫又と出合つ

再びドアを開けると、そこにまたさきの美少年がいた。

顔は王子様といった印象なのに、ジャージにサンダルといふ、いかにも引きこもりみたいな格好をしている。

いい格好をすればもっとカッコよくなるだらうに。世の中には勿体ない人もいるもんだ。

「あ、初めましてー同じぐらいの歳の子が住んでたんでもびっくりしました。」

「あはは、俺もです。てっきりおじさんが住んでるもんだと。」

「お互ごわまです。これからよろしくお願いしますね。」

「あ、はー。よろしくお願ひします。」

完全に人のよわやつな感じだった。…あんなに壁を殴るのには。

「こつてうしやーーー」

まぶしい笑顔で言った。顔のよせによつー層輝いていくよつに見えた。

名前は聞いていないが、確か表札には、藤崎と書いていたはずだ。

「行つてきまーす！」

そんな」とを考えていると、隣でグレーテルがいった。

魔女とはいへ、女は女。あのイケメンに反応しない訳がない。

：嫉妬？

なんだらか、この妙な感じ。

「なにボーッとしてるの？地図見なさいよ。」

「…地図？んー…」れつて、俺の学校の横じゃないか？

記憶ではそんな場所はないはずだが、いつも誰より早く帰っていたので、学校の周りの状況は余り知らない。

「…ねえ、あとどのくらい？」

「10分ぐらいい。」

「無口ね。」

「まあ、学校では喋らないしな。」

「ふーん。」

数歩歩いたところで、彼女は志魔野の方を向いた。

「…ねえ。」

「なんだ？」

「私とあなたが出会ってから、もう一回よね？」

「ああ、やうだな。」

「あなたはなんで、自分のことを話さうとしてくれないの？」

「やうでもないよ。ただ話すのが苦手なだけ。」

そうこうで彼はポケットに手を突っ込んだ。

「じゅあ、お前は？」

「志魔野！」

「私になんて呼ばれたいですか？」

「「」様。」

「却下。」

「お兄ちゃん。」

「おまけでシスコンだとは……。」

「嘘だよ。」カウでござる。

「本当に嘘？本当に本当に嘘？本当に本当に本当に嘘？」

卷之二

「だつて、お兄ちゃん変態なんだもん！」

声を高くして、アニメの萌キャラのよう囁いた。

一
変態言ひな

「あながち嫌では無さそうですねー。顔が一ヤケでますぞ、お兄ちゃん！」

「お前なー。」

「… ハハ、やつやつと楽しそうな顔しててね。あの怖い顔は嫌よ。」

「な、何言つてんだ、急に。」

「別にー。じゃあ、インタビューの続き。好きな食べ物は何ですか?」

「ハンバーグ。」

「す」く平凡ね。じゃあ、好きな妹は?」

「お前、謫子のるなよ…だいたい、好きな妹つてなんだよ。」

「わざお兄ちゃんつたらー。私は師匠、お兄ちゃんは弟子なんだよー。」

「はいはー。」

「次は真面目な質問。私のことなんて呼びたいですか？」

「バカ女。」

「速報ー！ウチはネーミングセンスの欠片も持ち合わせていないようですー！この件に関してグレー・テル氏は、グレー・テルで良いですよと述べているようですね。グレー・テル氏は心が広いですね。」

「なに一人でコントやつてるんだよ。着いたら、グレー・テル。」

「速報ですー志魔野氏がグレー・テル。」

「もう黙つてる。」

「ここに着くまで、グレー・テルは呆れるほど話しかけてきた。

本当に呆れるほどに。」

「はーい。」

ムスッとした顔でグレー・テルは言った。

当着地はただの駄菓子屋ねようだつた。

「駄菓子屋じやん。」

「いいえ、違うわ。中から魔力を感じるし、結界も貼つてある。」

グレーーテルのさすほうを見ると、うつすら文字のようなものが書いてあるのが見えた。

現在22時47分。

「すいませーん！」

そんな時間にも関わらず、グレーーテルは駄菓子屋に声をかけた。5分ほどたつたのだが、誰も現れない。

「…仕方ないわ。」

「ちょっと、待てよ！」

グレーーテルは不法侵入でもしそうな雰囲気だ。それは止めさせなければ。

「なかの様子を確かめさせるわ。…我に仕えし魔獣よ、目覚めたまえ。」

呪文のようなものを唱えると、彼女は二つ折りの黄色い紙をとりだした。

その紙を地面に置き、紙を開いたとたん、緑色の火がボワッといた。

「うわっ！」

まさか火が出るなんて思っていなかつたので、志魔野は腰を抜かしてしまつた。

そして、その妖しく輝く火のなかから黒いなにかが出てきた。

「…猫？！」

「猫つて言つた。」これはれつきとした猫又よ。ほら、尻尾が別れてるでしょー。」

グレーーテルの言つよひ、「黒猫の尻尾は一本ではなく、数本あるようだつた。

その数本の尻尾は別々に動き、どこか不気味なようすだつた。

「いやーーー！」

猫は一鳴きすると、志魔野の方に佐擦り寄つてきた。

「ふーん、「ウの事が気に入つたんだつて。」

「そ、そつなのか。」

動物に好かれるといつのは初めての経験だったので志魔野は少し戸惑つた。

いつもは嫌われて、逃げられるか、引っ搔かれるようなレベルなのに…。

「ニヤー、ニヤニヤ。」

猫の声かと思ったのだが、よく聞くとグレー テルから声が聞こえた。

「なに見てんのよ。恥ずかしいんだから！ 猫語は魔女の必修科目なの。」

そんな物なのか。魔女も大変だな…、と志魔野が思っていると、猫が壁をすり抜けて駄菓子屋の中に入つていった。

シマノ、結界を解く

それから10分。

「…なかなか帰つて来ないな。」

「もしかしたら、中でなにがあったのかも。強引だけど、今から結界を解くわ。」

「結界を?」

「あの猫又は結界除けの力があるけど、私やコウのよひこ、魔力がある者は入れないようになってるの。」

「俺に魔力?」

「「コウの心臓は私が補つてるの。つまり、あなたは魔力で生きている。魔女と同じような仕組みで動いてるから、結界にひつかかってしまうわ。」

そんなことを説明している間にも、グレー・テルはずつとチョークのようなもので何かを書いている。

「コウはここで立つてて!」

「わかった!」

グレー・テルに指示されたように、星のよひこの模様の所に立つた。

「」の結界はかなり強いものだから、簡単には解けない。…悪いけど、あなたの力を貸してもらひつわ。」

グレーテルは魔方陣を書き終えたようだつた。

魔方陣は丸く駄菓子屋を囲み、中にはよく分からぬ文字のようなものや、星が描かれていた。

「ああ、始めるわー！」
「かかっていいやダメよ。」

そういうてグレーテルはなにせらぶつぶつ咳きだした。
すると、駄菓子屋の古い引き戸はガタガタと揺れだし、それは家全体へと伝わつていった。

その動きがピタッと収まるど、また激しく、いつそつ激しく揺れ、すべての扉や窓が開いた。

「……。」

「やっぱつ、ね…。」

「なにが？」

「いいえ、何も無いわ。とにかく協力ありがと。」

「」の所驚く事が多すぎて、少しばはれてきたようだつた。

古い引き戸から中に入るど、そこはやはり駄菓子屋だつた。

一階はほとんど駄菓子屋で、奥に小さい畳の部屋が一室あるだけだった。

一階に登ると、さつきの猫又がいた。そして、横には人の足……？！

手と足は縄で縛られており、口はガムテープ……という、典型的な監禁スタイルだった。

「… つん！んつ！」

ガムテープがあつて喋れないようだつた。

今の時代珍しく着物を着ていたので、胸元ははだけ、すこし露出した肌は汗ばんでいる。

そのせいか、縛られているせいか、すこく色っぽい。……こんな時に不謹慎だが。

グレー・テルが指をパチンと鳴らすと、縄は緩み、ガムテープは剥がれた。

「…んはあ！死ぬかと思ったー！助けてくれてありがとう。」

本人は意外にも元気だった。

「… もしかして、グレー・テル様？！」

「ええ、そうですけど。」

グレー・テルなにか不満そうに答えた。

「グレー・テル様に会えるなんて光榮だわ！」

「この口ぶりからして、グレー・テルは偉い人…いや、偉い魔女なのだ
らうか？」

「…ありがとうございます。それより、これは誰にやられたの？」

「…めんなさい。顔は覚えていないの。魔女で…イテツ！」

「いいわ、ありがとう。多分あなたは忘却魔法をかけられているわ。
少し休んでちょうどいい。もしよければ、その間、この辺りを調べた
いんだけれど、良いかしら？」

「すいません、そうさせさせていただきます。どうぞ、お好きなだけ調
べて下さー！」

「さあ、コウ、これは誰の仕業だか分かるかしら？この辺りにまだ、
魔力が残っているわ。」

シマノ、魔力を感じる

「あなたはそろそろ魔力が目覚めているから、さうと分かるはずよ。」

挑発的な目でグレーテルは言った。初めて師匠らしさと言ったのではないだろうか。

「…魔力？俺は人間だぞ？」くら魔女の弟子になつたとはいえ、そんなことあるのか？」

「いいえ、無いわ。でもコウは特別よ。ほら、ここに手を当てて。」

そういうて、グレーテルは志魔野の手をとり、先ほど女性が倒れていた所に持つていった。

「田をつぶつて……。さあ、手に神経を集中させて……。」

白くて細長い、そして柔らかい手が志魔野の手の上で動く。

指示されたように田をつぶり、神経を集中させると、何か力が流れてくれるようだつた。

なにかに似ている。俺の心臓から感じる力に似ているが、何かが違う。

邪悪で惡意のようなものが入りこんでいる感じ。

……思い出した。

俺が死んだときのあの感じに似ている。

ハツと集中の糸が切れた。答えたはわかつた。だが、そのとたん、手の方が気になつて……。

綺麗な手……。

そこから田線を上にやると、細くすらりと伸びた白い腕、肩にはさらさらとした髪の毛がかかっている。顔を見ると、まるで人形みたいに綺麗な形の田に長い睫毛、整った口にすらりとした鼻がある。

まさに美少女といつてもいい部類の顔立ちだ。

あらためて、まじまじとグレーテルを見ると、胸が高鳴つた。

「…ねえ、そろそろ良いかしら。」

「えつ…？」

気付くと志魔野の田線はグレーテルの顔にあつた。

グレーテルの顔は当然歪んでいる。

「なに見てんのよ…。全く、わかつた?」

「ああ、わかつたよ。あいつだろ、ヘンゼル。」

「正解…だけど、手放してくれない?」

気付くと、下にあつた志魔野の手はグレーテルの手の上に、そして、しつかり握っていた。

「あ、『めん!』

最近なにかと歯止めが利かないことが多い気がする…。

「……つまりね、あいつはまた私の邪魔をしてきたつてことなのつー!」

「また?」

「さう、あなたを殺したのも私の邪魔をするため…。昔からあいつはなにもかも邪魔してくるの!」

「俺はお前の邪魔のために死んだのか…。なんか、切なくなる話だな…。」

「あつ、『めん。……でも、この際だから言つておく。私の目的は、ヘンゼルを殺すこと。そして、ヘンゼルを殺せば、あなたは心臓を

取り戻し、完全に人間になれるの。そのうち妹も…。」

「…だから俺を弟子にしてくれたのか…？」

「まあね。だいたいそういうよ！物分かりが良くなつて來たじゃない。」

「…そういつた彼女の顔はなにか悲しげで、まだなにか隠している」と
がありそつた。

「……そのためには、まず、ほつきを作りなくっちゃね！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9739z/>

魔法使いの弟子

2011年12月31日17時48分発行